



俳諧袖珍鈔
七

^ 5
1128
7





袖珍抄附句未滿之部卷五

古終舎黙池輯

雪丸

雪丸を雪丸の雪丸とて止るや 雪

いろはにけき初新の橋 雪

深き踊り公そく布橋て 雪

此名十句あり

秋休おくる又う橋あり

かれまを橋まつみ橋あり

橋く橋ありまれ古き

橋橋て小枝の橋の名を記し

雨のあつり此目いそあり

橋をひく雪まおき雪あり

一ひく鳥人ありて飛

壺山や使て小砂を橋あり

科のひくとも雪の橋

長きこの百そふ魚の名を記し

人ひそくき雪の雪あり

松橋ありて雪れ雪あり

子と射させく雪の橋



夕暮れ月の中を傘をさして歩
 りて西瓜を肩にゆくりり 甚
 秋をく米一升も産れて 為
 賜の秋はたらしきひき 必
 吹付く雨のぬけくる未申 森
 うりやをさうり 於人 必
 産るうとりの連音を懐は 為
 寺小をくくし業平の友 守
 吾れ中を菊錦の尾中と今 夫
 家にはけしる萩の下木 考
 いままたきて身れは帯板て 有
 舟中れりこれに袖とりく 為
 思ふ聲の響きの他種をさひ 守
鳥を養ふといふ事柄の白の事とて
 似たりて物と文とをさひの浦
 月毎にかえるをさひて 為
 乞食くくく 播磨木の中 為
 帯して帯あり九月もた 為
 月安がききやうけは 為
 八つりあるふれ真徳け 為

子巻状

おぼや

かしらる我に夜半のさひあや 箱
 長橋をかかふる海の中 柳葉
 二つんをさする鳥の中 柳葉
 うさう袖とあふる名西記 柳葉
 現まね月夜とあふる 柳葉
 それとさうりれ秋乃風書 自矢
 捨るの事とあふる身 柳葉
 念力とさうりあふる 柳葉
 乃れ也の松とあふる 柳葉
 長者の楽とあふる 柳葉
 から松をさふとあふる 柳葉
 者いかにあふる 柳葉
 若遠とあふる 柳葉
 子をさり親のあふる 柳葉
 それの秋とあふる 柳葉
 猫をさる柳葉とあふる 柳葉
 名とあふる 柳葉
 解とあふる 柳葉

流世集

秋の歌をお尋ねする所は
 月まのやといふ浦を身よき春
 西九山二とねさる居候て 四半
 ひもあまののくしくおくり
 濁方此の海をよとねさる居候
 小袖を半く持てる大平 惟盛
 似てもおそくともおそくとも
 あても区者此の海をよき
 掛ひま悲しくの柱きらしくと 庸
 おあてそあゆむ亦あ乃梳 平
 乳よりま谷うけておかや 刀
 すくねもぬくおせらぬらん
 茲の春ぬかぬおせらぬらん
 白き月よゆき川 如 庸
 や輝いてまゆをりて海を 如
 七種まていふあつひもかた 刀
 足せよ此の海をよき 平
 小倉形なりて重松の花 茲

流世集

雪やうらまき下なる花ゆき 杖
 刀の柄よりぬき子ぬくひ 如
 唐うらまき下なる花ゆき 杖
 秋もよとらる湯蓋の幌 依
 ぬくひ布子なる花ゆき 杖
 研いて持てる腰の巾着 如
 春あつたを葉の礼とて 茲
 あつたを葉の礼とて 茲
 白うらまき下なる花ゆき 杖
 髪を切ても髪を切ても 如
 夜あつたを葉の礼とて 茲
 貫ひてせよも茶に合ぬらん 良
 散らしたる花ゆき 杖
 此家におおをきりて 杖
 お局のいとあつたを葉の礼とて 良
 取り中の湯をきめてり 杖
 今つたを葉の礼とて 茲
 塙のゆきよもよき 杖

鄙哉 仲秋雨懐人
 名月やさ吹ふ其晴をまき 酒子
 かの上杉のたぐぬ中其音 酒
 秋を捨てたよきやうの色 千川
 中へ生れまの酒乃てらる 漆葉
 端なぬ舞渡りまき障り 以節
 曲さハ坂のやみん 淋子
 誰人乃夫先の付まきを挽 翁
 夢さきやよりさけちりあ 川
 入口の鐘がれれたのひま 翁
 きりり何ぞ其形板をく 子
 舟より登りたりて夕泳 衆
 柳うさぎもまきほひ帽子 川
 伏見やもひまきまきを挽 翁
 殿のころまきまきまき 秋
 存新よまきまきまき 翁
 度れまきのまきまき 翁
 花見かあるはまきまき 翁
 ほろりもたぐぬまきまき 翁

御遊集

ふのまや小船のまきまき 御遊
 極もすまきまき 御遊
 足りまきまき 御遊
 刀に柳まきまき 御遊
 食物の扱をまきまき 御遊
 玉掃てあまきまき 御遊
 小橋まきまき 御遊
 錦一又まきまき 御遊
 美語のまきまき 御遊
 玉掃てあまきまき 御遊
 又まきまき 御遊
 古歌まきまき 御遊
 小まきまき 御遊
 舟を焼てたれまき 御遊
 月影の白も得のまき 御遊
 登人まきまき 御遊
 岩掛のまきまき 御遊
 夕まきまき 御遊

後拾葉 毎てすこし
 清のふと 本巻の 十一
 一季の仕度いふ事終つて
 任中か舟さうしつたり
 うちまを射し出さるる
 少くも花を捲く小切な
 秋風も濁り候はるるや
 身はれ人を草鞋てむ
 帰郷のこひぬくも
 念伴此終りのゆく
 川を流るる水袖
 秋風も濁り候はるるや
 身はれ人を草鞋てむ
 帰郷のこひぬくも
 念伴此終りのゆく
 川を流るる水袖

宛世某

志く契ぬ 林の下やまうす
 八月をゆく 西遊乃月
 甘塩の綴り 秋の事
 外さうへさうかつら
 何れも木の葉乃か
 表れ小うのを
 作して一ひれ
 願けそそ 慈尊れ
 手織の帯うつく
 久き銀此出
 山云ふ此坊の
 かふと 苦より
 月影よ 冥け
 朝もさつりも
 物さるる 布子
 中にも 糸も
 手くも 糸も
 豆茶も ころりて

桂曆 若菜子
月出ればは燈傍にんはるるお 哉
朝夕のふら柴垣にやん 菫
はるるををふれはるるて 菫
はるるのい口ハおひる 菫
南うらなむるふり 何者 菫
よも記をのそくふの子外 燈
おとたけ煙火の隣に 燈
女座の終の節を便す人 人
勢と相ふりする恋れ友 古
痛切さえてあつきを位 菫
まゝ止ぬまはめて怖る 菫
さう浦たる曲舞れ章 東
秋風や子をたぬ身のをより 人
谷は危のあつしき月 依
り乃よせられて二おゆり 菫
仲と母をる教養乃振 菫
度人の路中と茶は茶より 菫
酔うて生よりるるそ風 菫

白備子
はるるををふれはるるて 菫
朝夕のふら柴垣にやん 菫
はるるのい口ハおひる 菫
南うらなむるふり 何者 菫
よも記をのそくふの子外 燈
おとたけ煙火の隣に 燈
女座の終の節を便す人 人
勢と相ふりする恋れ友 古
痛切さえてあつきを位 菫
まゝ止ぬまはめて怖る 菫
さう浦たる曲舞れ章 東
秋風や子をたぬ身のをより 人
谷は危のあつしき月 依
り乃よせられて二おゆり 菫
仲と母をる教養乃振 菫
度人の路中と茶は茶より 菫
酔うて生よりるるそ風 菫

白備子
はるるををふれはるるて 菫
朝夕のふら柴垣にやん 菫
はるるのい口ハおひる 菫
南うらなむるふり 何者 菫
よも記をのそくふの子外 燈
おとたけ煙火の隣に 燈
女座の終の節を便す人 人
勢と相ふりする恋れ友 古
痛切さえてあつきを位 菫
まゝ止ぬまはめて怖る 菫
さう浦たる曲舞れ章 東
秋風や子をたぬ身のをより 人
谷は危のあつしき月 依
り乃よせられて二おゆり 菫
仲と母をる教養乃振 菫
度人の路中と茶は茶より 菫
酔うて生よりるるそ風 菫

其後 徳田三郎 十

晴夜の燈をわやる西日の中
 影をくさす此後乃上
 吾れ亦の影を隔つたかみて
 當こそさする不來れ
 八月の暮に教ふる武者ひとり
 紫れ多しと筆淡やと家
 山さる屋も瓶のさまうて
 急飛来やと証進くらし
 夕裏日くは幸ゆる鞠の音
 ふき於襟の袖をぬく寸
 流石を標の指すちうひえ
 礼より髪を垂すかんじ
 湖金さき記念の轍も出ず
 何も腕丈は皆尽くたり
 棒の月二は直工作疲て
 際つきそ免し言の義強
 木を此おのち宿やゆめん
 甲冑を我風も身よりぬ

熱田二寺巡り十月廿二并亭

旅立ちし相公のまはる夕月夜
 庭さくせいくけりる落雷 一井
 上やくと雲を何と云葉脱て 散人
 残燐を足し中寄あつた 鳥
 翠竹く庭のまをくしり 鳥
 障子ぬけのまをくしり 草
 起もせそ穿も白ひ怖るき 車
 みくけり髪れけぬくひ 瓶
 五つもとてふらつら 井
 乳をのろふまはれは 人
 麻布を膝ひきく不織のて 環
 蘭をとりと先を 字
 夕まは先と中ゆ 外
 馬も何りうぬ山陰乃秀 橋
 小田の宿を袖に封を 鳥
 必あつた程あつた月 人
 風くからけをこれら 字
 鳥よつくと母のこゝろ 鳥

と成るはちかたき
してまき葉をまき
あつたのゆゑすし
西の風はちかたき

雨は行く雲は去る
夕雲の影はあふ
秋風よりくとあつた

ふとさへはる雪の
木葉の上はあつた
はつくと機織るは
手のうへと伯母の

空照る星の
ゆき葉をればと袖
旅のちのちと又
とねの月影はあつた

星はあつた
野水

舟はまき葉を
人とのちをまき
ゆき葉をまき

離るもまき葉を
まき葉の影はあつた
まき葉の上はあつた

押積り葉のまき
秋風くはるまき
まき葉の影はあつた

漆せぬ葉や他
葱の苗はあつた
秋風くはるまき
伏てまき葉の影

市の子供も老くす御布 曾良
日面もまきまきくさ清めて 居

露のひかぬくみの白ゆりや 露
おてや掃けん庭の葦木 露
七夕の八月の物のまひくも 居

筆もやまかきかきすす一まき 園指
二人くくくくくく大あゝ瓜 其南
裁物の麻のまきかきかき 居

まきかきかきかきかきかき 居
あまきかきかきかきかき 居
登のまきかきかきかき 居

古物屋のまきかきかきかき
月やその舞のまきかきかき
旅人あれのまきかきかき 居
まきかきかきかきかき 其南

盛修事

風のあも南ふちじりりりり
小あれ財と使ふ白雨 振
物もれく掃く音も抑れ 居

心も清く出物も居るを
おり乃しきふやふんを居る 居
水とたたく回井の大湯 自
永つるく岸のまきかきかき 居

樹もまきかきかきかきかき 松に
秋とまきかきかきかきかき 居
月もんとはひきかきかきかき 居

卯のまも母もまきかきかき 居
香きくまきかきかきかき 居
いんくのまもまきかきかき 居

梅もて目もくくく今何日 湖
木のかきかきかきかき 居

茶の井の草は魚の並に枯てぬ

我さうていふはさく枇杷の葉は秋

老てうらうら山麓の石を

日長家取相の言をうけて明

風流身こそ

ふの朽く出雲為ら板敷の

ひらうらうら橋のふせき

風さうていふの菊の心は情で

市人よいてる行堂人雪の空

酒の片たたく殺け枯樹

竹の月よえん河内をうけて

空を菊の海もゆりや作大板

冬さうていふはさく小菫の株

月もさき宵もさうていふ

手もさき宵もさうていふ

膝上のせうていふ

雪の月よく懐かき

からさうていふ

角のさうていふ

草舟や麦の中ゆく

陽さうていふ

為事やさうていふ

木方を取くさうていふ

月をさうていふ

懐のかうさうていふ

於此もさうていふ

あつていふ

本よりいふ

多々の涙や情ておもむき
 一帯志のしるはるるの我 幸由
 ねくねくかてそ木の梢ふ 彦川
 小まきりそむくそむの虫 ぬ
 多き考へあふれくの枝枯 能良
 茶れゆへはるるまのひきき ぬ
 さしくのひききしむも様か ぬ
 とき目もやくそむくぬり 棟光
 かききたのねいれもかたて ぬ
 山いさくくそ後るるい 子那
 檀の木の花にすのぬきか ぬ
 せむさるそとそとふしむ 終
 梅そくきのや花とほに ぬ

松葉よふまきさし二さひつ 秋花

芭蕉翁の柿の歌

夕のそよよ東風まよふ五日 知豆
 望月そよよわはるれ加のむ ぬ
 志のまき松て海くそとら ぬ
 志つひつてつる松は夫松 相葉
 ひまろくと新居けやそむせ ぬ
 菟菟さひよゆへおの月 ぬ
 又そよよあかきそむきつねの物 惟盛
 手集とかなひそんまふ ぬ
 志んくそそそそ英波の松音 巳言
 望月くそめん木波の五月の ぬ
 赤んかたてつへの酒撒煙 珍頑
 七葉くそたふあぬ松葉 ぬ

海濱の波打もくもく
 松並雪と風のやうに
 物一つもはたけみゆく
 古人のやうに歌の本
 山の嶺むらうに
 秋のやうに
 芭蕉とくく
 田舎とくく

月代や孫もくもく
 秋のやうに
 芭蕉とくく
 田舎とくく
 古池や
 菅のやうに
 秋のやうに

何と好く来吹風もほろろと
白けたりとぞ秋小ゆく哉

送別

秋のつれは先くの宮をが
并に暮やうと秋小暮やう

物出て扇打さうと秋小暮
吹やうと秋小暮やう

能はるとは替りかたきと秋小暮
秋小暮やうと秋小暮やう

手は戸や日暮と秋小暮
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

秋小暮やうと秋小暮やう
秋小暮やうと秋小暮やう

新五
采女石女のお孫のおくのき

ひとりきよくむき花の目

二四序と西へ宿のきこぬ

板れぬの豆うくと吹

ききたむけおひいとう掃き

小僧あつていうこつらあ

釣籠のほかにきよの海助

その意いさげとむきあひ

まの目うきあふもくれ候

すきと切の逢ふきり

登りあつて麻ゆき入藤の候

候あつてつれづれの御

文料の里の宿とあひ

端指もろりあつてみる竹

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

屋敷の音ハかる能立
きのふもなほの様の趣あり

君も信もさそれ三肌とゆふ装助
助 友あり可はずはゆるう雲正
かたけり河東増もはな後い

扱い家れむ夜た凡一驚の
もあつ夫の指うさ結信 空
冷きま石ふさ家くく虎お徳

一白洲

肩より物うさ此れかた結お
くとなけりけりさ思

後生結うひとみさひい
まろりの後ゆきまはつた

勝る梅さ平はきさうりれ

おごその中をひくは

大結肩の結しと見不三の獄
改りさこれ丹田子の浦あり

虫の發白髪とさうかゆふれ
瓜の中ごの穿き整うそ

孔子ハ舞臭の指しゆゆれ
物起さる書全の楯は月空

況ゆる芝花くく帰る
萩すきさ何刈草一やく

於る才も鬼の備合れ生者
あせや海杉若竹の末途

狭橋く大心熱の苦ささう
に翁若義薩ふ雅をおせて

船桐のあふさき山にて
丈草の舟をお等おとす

破のうしろも果しや入ぬん
大は奈良をよき奈良の時

武者あつと引つらひよんと
敵うしろとせむ屋のま

桶ひとつ物のまねとめり
それ人あぬらみそれ虫

これ當りつるまの敵あつり
有綱歩の波戸の浦浪

りこそをたれいぢるなせ
中より又おとせよとんえ

うむを既し香家とあつり
狩あとききつる鐘大石山

あつらうま素浪あのみ
世界とゆつらうま大石狩

お場おましよとの浦浪
紛擾下んき帯 ちりま玉袋

上の程さうかい竹袋
なれりとは我子おとりの程

心うかあふもおのつら
送る猪をあつらえをさひ

魚の揚をすし海に漁めれ
女院逢うれ二位の尼細

大石の退居し守お察す
味暗腕の上白つき晴る山

夜ふらあつらへるまのま

みのまき 榎ゆき 玉の虫

子望 玉之目 此香と流す

葛蒲のまき 刺刀とく

桂ふよふ 竹こし 山吹

毛も又うごき 燈籠 表向 十柱

藤花 玉のひ 玉浮花の耳

菩提りと木枕 ひとかたて

あふれぬ 松浦 玉之部 表向

こや 舟ののり けり 玉之部

と永手巾

仔細 玉之部 表向

紫花 玉之部 表向 秋と玉之部

月孔 飾り 玉之部 表向 玉之部

玉之部 表向 玉之部 表向

芭蕉 玉之部 表向 玉之部

月と玉之部 表向 玉之部

松枝 玉之部 表向 玉之部

綴り 玉之部 表向 玉之部

追加

箱取 白

○梅 玉之部 表向 玉之部

持一つ 玉之部 表向 玉之部

○我 玉之部 表向 玉之部

○月 玉之部 表向 玉之部

○桂 玉之部 表向 玉之部

○藤 玉之部 表向 玉之部

○松 玉之部 表向 玉之部

○月 玉之部 表向 玉之部

○桂 玉之部 表向 玉之部

○藤 玉之部 表向 玉之部

○松 玉之部 表向 玉之部

その旅とてまよとらん夕
 ○秋のれゆく先くの言なれ 木南
 秋の森とくくの秋の海の中
 ○芳世とう丘ふと後梯の美 本章
 畠れりふかす卯れた
 ○ふくはなまきたるうまは字 松碩
 うたれて蝶のなごめめ
 ○ま州ふあつちのちとく言 初登
 なるもてとたつと宮此卯の初
 ○ねくや雨たよらる秋の色 雪堂
 ともはくところふたねねね
 ○さき時をそるはを難うは 季平
 月ともみちと海のを合
 ○宿あふせん西のちと秋を 震
 へそ成と又かしての破笠
 ○たのまをさきまはねれ 勝英
 秋やへらと蝶のくつれ
 ○海のまてと昔はせん木南 峯山
 落つてよおの髪は十一
 ○やうはは終冬まよはま 名河

田植とくまの旅のいま
 ○秋のまはし秋とて身は秋松 雅良
 茶は湯よのまのまのひよ
 ○おきまき旅は旅とてま 如行
 古くうやの秋はとくし
 ○まき行はびりりのまを涼 虫翠
 けくくはゆくはまのい
 ○まき南は旅は旅とてま 許六
 まきとくは旅は旅とてま 本章
 ○まきやまは中ゆくのま 本章
 かけろあつちのたのいと
 ○まき今とてまのまのま 巳百
 ねまのうたの不破の五原
 ○ねくまをさきてまのまが 本河
 小まよ首がうくこのま
 ○あまてやまははくまは 園女
 名あまはくまはくまは

翁の二三

○梅は冬に永く採今二月御
 東の道に 實素つくと
 葉の中ふ葉の葉は葉の
 ○ふとれて葉の葉は葉の
 つつこの葉の葉は葉の
 夕御ふ御ふ御ふ御ふ御
 ○青やうとや いりうとや
 市れりともいふとも御
 日表ふふとやいりうとや
 ○長まきや葉は御ふとや
 うらうらうとや葉の御
 葉の中ふ葉の葉は葉の
 ○葉の葉は葉の葉は葉の
 りくとや御ふとや
 七夕の八日の葉は葉の
 ○葉の葉は葉の葉は葉の
 葉の葉は葉の葉は葉の
 ○葉の葉は葉の葉は葉の
 葉の葉は葉の葉は葉の
 葉の葉は葉の葉は葉の

いすいすいすいすいす
 ○葉の葉は葉の葉は葉の
 二人いすいすいすいす
 裁物の葉の葉は葉の

嘉永四年庚春

江戸日本橋通三丁目
須原屋茂造

同 芝林明花

同 日本橋通三丁目
岡田屋嘉七

同 日本橋通三丁目
山城屋佐造

同 本石町十郎店

英 大助

京都三条通堀河西入

林 芳造

同 寺町通五条上西

上城屋佐造

大坂心外橋通市町南

河内屋茂造

同 心外橋通市町南

河内屋茂造

紀伊若山

常屋屋茂造

發 行 書 林

